

英語教育における翻訳の役割

—歌詞の翻訳指導の実践から—

円城 由美子・平野 牧子

The Possible Role of Translation in English Education: The Case of a Lyrics Translation Project

Yumiko Enjo, Makiko Hirano

抄 録

本稿は、翻訳が「英語教育の一環」としていかなる役割を果たし得るのか、という問題意識に基づき本学にて行った翻訳授業の報告である。学生の英日訳に見られる特徴の一つは、状況や目的に関係なく辞書から選んだ語義をつないで文章を作るという習慣である。しかし、翻訳では英文は必ずコンテキストと共に存在することが前提であり、状況に応じた原文理解や、目的に合った訳語選びが求められる。このように、コンテキストの重要性を認識し、状況に応じた原文理解や日本語への適切な表現方法を学ぶことは、より精度の高い英文理解、ひいては新たな言語観の習得へとつながる。この認識のもとで翻訳授業を行った結果、教育的効果を示唆する結果が得られた。

キーワード：翻訳、英語学習、コンテキスト、歌詞、言語運用力

(2013年10月1日受理)

Abstract

This paper is a report on translation classes which were conducted at Osaka Jogakuin University, based on questioning what roles translation can play in English education. One of the common features of English-to-Japanese translation by students is that they habitually make Japanese-like translation, using Japanese words they choose from dictionaries without considering in what situations or for what purposes the English words are used in the text. Any English text to be translated, however, has context and translators should comprehend the source text properly and choose Japanese words suited to the intent of the text. It is important to recognize the importance of context, the proper comprehension of source texts, and suitable Japanese expressions. This will lead students to more precise comprehension of English texts and, moreover, to acquisition of new linguistic perspectives. Conducting translation classes based on this perception has positive implications for the effectiveness of the classes.

Key words: translation, English learning, context, lyrics, effective language use

(Received October 1, 2013)

1. はじめに

偉大なる翻訳者たるゲーテは、「外国語を知らぬものは自らの言語を知りえない」(Kersaudy 2001: 147)と述べている。そして、これは反転も可能である。つまり、外国語を知ることは、自らの言語を知ることなのである(ウスティノフ 2008: 9)。言語認識には相対化が重要な意味を持つ。ある言語を相対化させて認識するには、別の言語を知る必要があり、複数言語を知ることによって、単一言語しか知らない場合とは異なる言語観を得ることができる、ということである。

このような議論は、外国語の学習にとって——同時に自らの言語を知るうえで——、翻訳が重要な意味をもつ可能性があることを示唆している。

より具体的に実際の英日翻訳という作業で考えれば、英語だけでなく日本語の知識も必要不可欠であり、それを学習に取り入れれば、外国語と自らの言語を同時に強化していくことになる。そのような活動を通じて英語だけでなく日本語への意識を高めることは、さらに英語への意識を高めることにもつながり、言語一般に対する意識も高める可能性があると考えるのは、自然なことのように思われる。

しかし、実際に翻訳の実務家として、数年間大阪女学院大学で翻訳に関係する授業を行いながら、翻訳を英語教育と関連づけて位置づけ、具体的に授業内容に反映させることは容易ではなく、試行錯誤の繰り返しであった。そこで本稿では、担当した翻訳関連クラスの一つである Studies in English-Japanese Expressions (日英表現研究)において行った歌詩の翻訳の事例報告を通じて、翻訳が英語教育としていかなる意味において効果的であり得るのか、授業内容およびその可能性についての考察と展望を紹介する。

2. 大学における翻訳教育と英語教育

2.1 翻訳の特徴と英語教育への位置づけの難しさ

翻訳の定義は多岐にわたるが、ここでは幅広く合意されている極めて基本的な定義を使用する。一般的には「起点言語テキストを意味等価的な目標言語テキストで表現すること」(平子 1999: 29)とされる¹。すなわち、翻訳のプロセスとは原文の内容を正確に読み取り、その内容を別の言語で言い換え、文章にすることと言えるだろう。それはまた、第一の読者である翻訳者が第二の筆者となって、原文の内容を自分の言葉で再表現することである、とも言える。

翻訳とは、慎重な言葉の選択を経て生まれるものである。先に述べた翻訳の定義にもあるように、基本的には原文がわかったうえで原文と「等価」になるように最終的に訳出する言葉に置き換える作業が始まる。それは、「原文の内容とその表現が一致するように翻

訳者が思考錯誤、工夫を重ねるプロセス」(広田 2007: 2) とも表現される。

このように、読み取り、言い換えの思考錯誤、最終的な訳出という複数の段階を、複数の要素を統合しながら 2 言語間で進めるのが翻訳作業である。そして恐らくその多面性ゆえに、言語スキルの向上という特定の面にフォーカスをあてる英語教育の一環としては、位置づけるのが難しいこともまた、否定できないだろう。つまり、翻訳プロセスにおいて英語という言語とのかかわりは一部に過ぎない、という事実が、英語教育の中に翻訳を位置づけにくくしてきた大きな要因と言えるのではないだろうか。

2. 2 大学における英語教育としての翻訳教育の模索

実際、これまで実務家として 5 年以上にわたり大阪女学院大学で翻訳に関係する授業を担当してきたが、英語教育といかに結びつけるかが常に課題であった。つまり、大学の英語教育における翻訳の授業の位置づけである。開始当初の翻訳の授業では、プロ養成学校のカリキュラムをなぞらせ、より多くの翻訳をこなし、より洗練された翻訳ができることを目指す、いわゆるスキルベースの実践中心で進めていた。しかし、翻訳者養成の枠組みで行われる翻訳スキルの向上を目指す活動が、大学における英語学習および言語運用能力一般の向上といかに関連するのか、漠然と関連性を評価しながらも、端的に説明することができないままであった。

英語教育に翻訳はいかに有効であるのか、との考察を重ねるうちに、2 言語重視とコンテキストの前提という翻訳の特質が、現在の英語教育ではあまり強調されていない部分を補う要素となり得、そのことによって、実社会での英語活用能力を高める一助となるのではないかとの結論に到達した。

このように、依然、漠然とではあるものの、翻訳の英語教育における役割とは、「実社会での英語活用能力の向上へとつなげること」という前提に立った上で、現在の学生の英語の活用方法もしくは英語との向き合い方において顕著な改善すべき点を検討した。その結果、学生の英日訳でもっとも特徴的であり、また、少なくとも翻訳を行う上で、また実際に言語を通したコミュニケーションを行う上で根本的に改善が必要な点は、状況や目的に関係なく辞書から選んだ語義をつないで文章を作るという習慣ではないか、との認識に至った。

2. 3 コンテキストを意識する手段としての翻訳

上述した学生の英語から日本語へ訳す際の習慣は、残念ながら科学的なデータ分析によって得られた知見ではない。しかし同時に、これまで本学で出会った数百人に上る学生との翻訳授業内でのやりとりで見受けられた顕著な特徴である、とは少なくとも言える。日本の英語教育で用いられている文法訳読では、学習者の文法や語彙の理解度が教師に確認できるように訳されていることが重要であり、日本語の不自然さはあまり問われない。このことが先に述べたような英日訳の習慣を生み出している一因と考えることができるだろう。また、一般的に英語学習で使用される教材では、訳出が求められる英文に必ずしも

文脈が与えられているとは限らず、コンテキストとして考慮すべきことがない場合が少なくない。そのため、辞書が列挙している訳語の中から一つの語義を探そうとする習慣が自然と身についているとも考えられる。

翻訳の実務家としての立場から明らかに言えることは、状況設定を考慮せずに一単語に一訳語を前提として語義を選択するような処理は、翻訳作業とはまったく異なるものであり、せっかくの英語力を実際のコミュニケーションで十分発揮させる上で弊害である、ということである。翻訳で取り扱う英文には必ず個別の状況や文脈などを含むコンテキストが存在し、それに応じた原文理解や訳語選びが常に求められる。また、その延長線上ではあるが、英語の一単語が日本語の一語に対応するという前提も、もちろんない。さらに辞書に関する認識で言えば、英和辞書とは、使用頻度の高い、言い換え可能な日本語の単語の羅列に過ぎない。一つの英語の単語に対して言い換え可能な日本語が無数に存在することは珍しくない。そのような状況を考慮すれば、訳語とは辞書から与えられるのではなく、辞書を参考にして翻訳者自身が考え出すものなのである。

2.4 コンテキスト認識の先にある言語力の意味

では、言語はコンテキストの中であって初めて明確な意味を持つ、という翻訳の世界では当然の前提を英語の学習者に認識してもらうことによって、具体的には何が得られるのであろうか。実際の翻訳作業は多岐にわたる要素を統合して行われ、コンテキストを認識することのみによる学習効果を科学的に証明することは容易ではないだろう。そのことを承知の上で——つまり、検証の可能性が低いことを承知で——あえて考察の結果を述べれば、一つは少なくとも原文理解の精度が高まる、ということである。さらには、英語だけでなくすべての言語はコンテキストの中で使用されているという、当然でありながらも無自覚でありがちな言語に対する認識を獲得することができる。さらに、それによって、日本語の運用力が高まる可能性も大いに期待できるだろう。日本語の運用力が高まることは英語の運用力を高めることにつながる可能性があることは、冒頭のゲーテの言葉も示唆しているとおりであろう。

もちろん、翻訳のように2言語を取り扱う作業を英語教育に取り入れることが、例えば、英語教育におけるモノリンガルによるコミュニケーションなアプローチを否定するわけではなく、また、先にふれた不自然な日本語訳を生み出す文法訳読の文法学習における効果を否定するものでもない。モノリンガルによるコミュニケーションなアプローチも文法訳読の枠内での英日訳も目的や状況によっては効果的であり必要な学習であると認識している。その上で、翻訳分野の持つ新たな側面を英語教育に取り入れることで、より「多面的」もしくは「立体的」とも言える英語能力ひいては言語運用力が習得できるのではないかと考えるに至っている。

言うまでもないことであるが、翻訳と英語教育との関連についての考察はまだ緒についたばかりであり、今後、研究を重ね、英語教育における翻訳のより明確な効果および位置づけ、および、その位置づけにのっとったプログラムの拡充が必要であることは明らかで

ある。本稿は、あくまでもそのような不十分な状況を踏まえたうえで、今後へ向けての第一歩として現在の認識を示すものである。以下、未熟ながら上述のような問題意識を抱えながら行ってきた授業内容および、今後へ向けての展望を報告する。

3. 授業概要

3.1 対象学生

大阪女学院大学国際コミュニケーション専門展開群の3、4年生を対象とした半期のクラスである。学生数は10-20名程度。

3.2 目標

原文を解釈する際に文脈理解や世界観の構築がいかに関与するのか、その重要性を実際の翻訳を通じて認識できるようになることを最大の目標に据えた。

この目標を踏まえた上で、ふさわしい翻訳テキストとして歌詞を選択した。その理由は、1) 各単語の抽象度が高く、文脈への依存性の高いテキストであること。つまり、各生徒がどのような文脈や世界観を再構築するかによって、原文解釈や訳出の際の言葉選びに大きな差が出ることを示せるため。また、2) 実際に翻訳対象となる英語の単語は少ないために、各単語について深く思索をめぐらすことが可能になるため。さらに、3) 原文の単語数の少なさに関連するが、必然的に訳出する日本語の数も限定されるため、日本語に対する意識も高まる可能性が高いからである。

歌詞の翻訳作業を通じて、言語理解における背景知識の重要性および文脈に応じた類推力の重要性について認識を新たにすることが目標とされる。

3.3 講義内容

授業は1コマ90分、15週で23回（8週目までは週2回、9週日以降は週1回）。授業では英語と日本語を併用する。学期末にファイナルプロジェクトと呼ばれる歌詞の翻訳を中心とした課題に取り組む。課題は、①歌詞翻訳、②時代背景の説明、③各自の詞訳に関する説明（原文解釈、訳語選択の理由、工夫など）、④訳詩を終えての気づき、とりわけ、学期を通して取り組んできた翻訳に関する知識の獲得が訳詩の際にいかに関与されたのかなどを、翻訳作業とそのプロセスの合理的な説明を通じて学生自身が認識することを目指している。

一学期を通じて行う講義およびクラスアクティビティーはすべて訳詩に取り組む際に何等かの形で準備となるよう意識している。

学期前半では、文法面から見た言語的な相違およびその翻訳に及ぼす影響を学ぶ。具体的には主語の役割の相違や、単語の意味の範囲の相違など（詳細は後述する）。次に、小説や詩などで英語の原文と翻訳を比較し、文化の違いや時代の違い、翻訳者の視点など、翻訳に影響を及ぼす要因を考察する。また、歌詞翻訳への導入として、学生自ら絵本の翻

訳にも取り組む。絵本や詩の翻訳では、主語や単数複数など文法的な差異の翻訳的処理だけでなく、詩の翻訳におけるスタイルやリズムの重要性、および、その訳出作業の難しさを意識させる。

講義と並行して、翻訳課題の歌詞についての背景知識を得ることを目的としたアクティビティーも実施する。活動は2種類に大別される。一つは、歌詞の内容に関連した英語文献 (*The Cold War / Famine, Hunger And Starvation In Africa*) のサマリー、翻訳およびプレゼンテーション (詳細は後述)。さらに、背景知識を得るためのさらなるアクティビティーとして、歌詞内容に何らかの関連があるゲスト (冷戦経験者/ウガンダ出身者) を招き、話を聞く。

4. 歌詞の翻訳を目的とした授業の実践報告

学期末に課す歌詞翻訳についてはすでに説明した通りであるが、歌詞翻訳にいたるまでの準備として行った講義および実践内容について、以下に詳述する。

4. 1 言語的相違の認識

既に述べたように、英語学習において学生たちは、文法的には正しいが不自然な日本語を書くという行為を、その日本語の不自然さには無自覚なまま長年行ってきた。そのため、英語学習という環境の中では、日常的に自分たちが使用する自然な日本語を念頭に置かず、訳出してしまふ傾向が強い。ここでは、この習慣を断ち切り、学習後に翻訳を行う際には、自然な日本語への訳出を学生が意識できるようにすることを目指す。

4. 1. 1 主語の役割の相違

端的に上述のことに気づいてもらうために、特に顕著に表れる例として紹介するのが英語の主語 I と日本語の私の違いである。

相手との関係性に関係なく自分を I と呼び相手を you と呼ぶ英語とは異なり、日本語では、これにあたる単語を決定づけるのは相手との関係や状況である。つまり、友人、恋人、親子などの人間関係および家庭、会社、学校などの場の設定が、言葉選びの主要な決定要因となっているのである²。このように日本語では自らを示す人称代名詞は「私」だけでなく多数存在し、また状況によっては省略もする。You に相当する単語に関しても、日本語では複数の選択肢があるが、日常的には省略する傾向がある。このような I と you に対する日本語の特徴を無視した訳出は、文法訳読の学習では日常的に行われている。その結果生み出される日本語とは、文法的には間違っていないものの、時に極めて不自然な日本語となる場合が少なくないのである³。

主語の役割の相違は、英語とは異なる日本語の特徴を端的に示す一例であるが、ここでは、それぞれの言語における特定の言葉やフレーズ等の使用方法の特徴を認識し、その違いを無視して英語から日本語に逐語的に訳出することが、なぜ不自然な日本語を生み出す

ことになるのかを理解し、その上で、翻訳する際には言語的な特徴に応じた表現が必要であることを学ぶ。

4. 1. 2 コンテキストから語義を拾う

この学習は、それまでの英語学習によって学生が身に付けている「辞書の一番上の語義を使う」という習慣を断ち切ることを目指すものである。また、英語の辞書に語義として記されている日本語は、厳密には「意味」というよりは日本語で言い換え可能な言葉の羅列にすぎず、本来の英語の意味は辞書に記されている日本語に限定されないことに気づいてもらう⁴。これは、適切に翻訳を行う上で必要不可欠な認識であるが、さらに、そもそも言葉とは、他の言語と一対一で対応しない、という、言葉一般に対する新たな認識を獲得するうえでも重要な学びである。また、言葉はそれぞれの文化における思考を反映しており、翻訳の際にはその文化差を認識しながら、訳語を選ぶことが重要であることも学ぶ⁵。

改めて言うまでもなく、同じ物を示すとされる英語と日本語でも、各単語が表す意味の広がりや一つの単語が持つ意味は英語と日本語では異なっている (Suzuki 2001: 46)。母語だけで生活している際、日常ではこのようなことに対して無自覚であるが、母語の使用においては普通、文脈に合わせて同じ単語を異なる意味で使用するという操作を無意識のうちに行っている。発信者と受け手——話し言葉であれば、発話者と聞き手、文字であれば、書き手と読み手であるが——は、特定の言葉に対して同じ認識を持ち、同じように文脈を理解するために、一つの単語に包含される複数の意味の中から両者が同じ意味を選びとり、誤解せずにコミュニケーションがはかられるのである。

講義では、単純な例を用いることでこのことに気づいてもらう。例えば、日本語の「鼻」はもちろん英語の「nose」であるが、英語では、ゾウの鼻を示すのには別の言葉「trunk」が使われ、また、その同じ「trunk」が木の幹も意味することなどを説明する (Suzuki 2001: 39, 46)。

4. 2 翻訳の比較

一つの原文が翻訳者の解釈や翻訳の目的、アウトプットのメディアによってニュアンスや響きの異なる幾通りもの訳へと翻訳可能であることを理解してもらう。これは、最終的に行う歌詞の翻訳で、作者の意図の読み取り、原文解釈や目的・状況の設定が、いかに最終的な訳出作業にとって重要であるかを学生が認識し、自らの歌詞翻訳の際に役立てることを目的としている。

翻訳者は作者の意図を汲んで英文テキストの読者や目的を設定しなければ、所与のコンテキストにおける「意味」を正確に読み取ることが出来ず、正確に再表現することも出来ない。それは、無限にある選択可能な日本語の語義の中から、ニュアンスも含めて汲み取ったコンテキスト上の意味を、ニュアンスも含めて正確に表現する日本語を選びとる作業である。このように、ここでは世界観の再構築が翻訳作業の中での重要なプロセスであることを学ぶ。

作者の意図した世界観を再構築するには、正確な英文解釈が必要である。正確な英文解釈には、作品や作者に関する背景知識の獲得および英文テキストの文法や構文を含めた正確な読み込みが欠かせない。

4. 2. 1 媒体・スタイルによる違い

まず、媒体として特徴的である絵本を取り上げる。絵本では、絵と文字とがセットで原文解釈および訳出作業をする必要があることや、対象年齢にあわせた言葉えらび、音読を想定したりリズムに考慮した訳語選びが必要であることを学ぶ。

その上で、歌詞の翻訳にも共通する、詩の翻訳について特徴を学ぶ。絵本同様、リズムも大切であるが、抽象度の高い限定された言葉を解釈する上で、作者の置かれた状況や、歌詩全体の世界観が訳語選びで重要な役割を果たすことを学ぶ。

4. 2. 2 時代による違い

同じ作品を訳した複数の翻訳の間には、訳された時代の思考、価値観、好まれた表現などの文化的要因にもとづく訳出の違いが存在する。言語は文化における思考を反映し、その思考は時代と共に変化する訳であるから、言語そして言語を用いて行なう翻訳が時代と共に変化することは当然のことであろう。

このような認識の下、同じ作品の複数の翻訳を比較することにより、ある時代の翻訳者がその時代を生きる読み手の文化をいかに認識しつつ翻訳を行ったかをここでは学ぶ。使用作品は、J.D. サリンジャー著、*The catcher in the rye*⁶で、時代の異なる2種類の翻訳を見比べる。

4. 2. 3 翻訳者による違い

翻訳するためには、原作者が作品に込めた世界観を可能な限り正確に構築することが不可欠である。翻訳者は、原作者や作品に関する背景知識を踏まえつつ英文テキストを緻密に読み込むことで、この世界観を把握する。つまり小説や絵本であれば、原作者が場面や登場人物、あるいは読者をどう設定したかを把握するのである。これらの設定が出来て初めて日本語の訳語が決定される。

授業では、一つの原作を異なる翻訳者が訳した複数の翻訳を比較し、各翻訳者が構築した原作者の世界観の差異が訳語のニュアンスや言葉使いという差異となって現れることを学ぶ。また、このような差異がある一方で、筋の展開といった作品の根幹部分には訳者ごとの大きな差異はなく、このことから、訳者による原文読み込みがいかに緻密で正確であるかを学ぶ。使用した作品は、アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ著、*Le Petit Prince*の英訳版 *The Little Prince*⁷である。

4. 3 背景知識の獲得

歌詞翻訳に必要な背景知識を英・日両言語で得ることが目的。歌詞が作られた歴史的背

景や歌詞の理解を深めると思われる情報を獲得する。

4. 3. 1 英語文献の読解、サマリー作成、部分的な翻訳活動、プレゼンテーション

歌詞が書かれた時代についての文献を読み、要約や部分訳を行うことによって、歌詞に関連する知識や語彙を英・日両言語で獲得する。該当する分野（*Imagine* は冷戦、*We Are the World* はアフリカ）に関する英語の本を、一学期をかけて読了する。全員が本の全範囲に目を通すが、各自に割り振られた担当箇所については、英文の意味や日本語訳をクラスメート全員に説明するため、より精度の高い理解が求められる。さらに英・日両言語でのリサーチを課すことで、翻訳時に必要な語彙を両言語で培う。

手順

- (1) 学生一人1テーマ（A4で1～2ページ程度）になるように、学期はじめに本を振り分ける。
- (2) 担当者は日本語および英語で資料や文献にあたり、プレゼンテーション時に配布する資料および訳もしくはサマリーを準備する。
- (3) プレゼンテーションで担当箇所の内容を日本語もしくは英語で説明するとともに、サマリーもしくは日本語訳を配布する。
- (4) プレゼンテーションの内容についてはクラス内で質疑応答やディスカッション、講師による補足説明を行うことで理解をより深める。

4. 3. 2 ゲストスピーカー・セッション

文献からは学べない生の声、経験談を聞き、課題歌詞の翻訳に必要な背景知識を増やす。また、新たな物の見方を獲得することで、状況の立体的な理解へとつなげる。

手順

- (1) ゲストの出身地について日英両言語でリサーチする。
- (2) リサーチ内容に基づき、当日ゲストに尋ねる英語の質問をクラス内で話し合い、さまざまな視点からの質問ができるよう質問内容を調整する。
- (3) ゲストセッションの後振り返りペーパーを書き、セッションを通しての新たな知識や視点の獲得、背景に関する理解の深まりなどについて再認識する。これらの学びが、歌詞を翻訳する際に重要な世界観の構築に大きな役割を果たす。

5. 学生の歌詞翻訳の課題および結果

学期の集大成として歌詞翻訳（*Imagine / We Are The World*）に取り組む。学期を通して学んだ、言語的差異、コンテキスト、背景知識といった翻訳に影響を及ぼすさまざまな要因を踏まえつつ、作者の描いた世界観をできるだけ正確に表現する。以下に課題内容の

詳細を記した上で学生の訳例、解釈説明およびコメントをいくつか提示する。

5. 1 学生への課題

学期末に提出する課題の構成は、①歌詞翻訳、②時代背景の説明、③各自の詞訳に関する説明、④訳詩を終えての気づきである。

②には、授業で使用した英語文献からの情報および各自の研究結果を記す。③には、原文解釈における根拠、訳語選択の理由、工夫などに関して説得力ある説明を記す。④には、学期を通して得た翻訳に関するさまざまな知識が、各自の訳詩にどのような影響を及ぼしたかなどを記す。このように実際に翻訳を行い、そのプロセスの合理的な説明を行うことによって、学期を通しての学びを再認識することを目指す。

Imagine by John Lennon

Imagine there's no heaven
It's easy if you try
No hell below us
Above us only sky
Imagine all the people
Living for today...

Imagine there's no countries
It isn't hard to do
Nothing to kill or die for
And no religion too
Imagine all the people
Living life in peace...

You may say I'm a dreamer
But I'm not the only one
I hope someday you'll join us
And the world will be as one

Imagine no possessions
I wonder if you can
No need for greed or hunger
A brotherhood of man
Imagine all the people
Sharing all the world...

You may say I'm a dreamer
But I'm not the only one
I hope someday you'll join us
And the world will live as one

5. 2 学生の訳出および考察

翻訳のアプローチを英語学習に活かすという目的のもとで、学生には歌詞の翻訳をしてもらったが、すでに述べてきたように、翻訳には複数のプロセスが伴い、どのプロセスがどの部分に活かされたのかを特定することは、学生の課題を読むだけでは明確に把握することは困難である。

実際には個々のプロセスがリニアに進むのではなく、いくつかのプロセスが同時に、もしくは相互に影響を与え合いながら、時に逆行して反復しながら最終的な訳出へと進んでいく。原文の英語テキスト読み込みと背景知識の活用および、世界観の構築は、そのような反復プロセスを繰り返しながら進められる作業である。厳密に翻訳的なアプローチのどのプロセスが純粋な英語力の向上へ寄与したのかを判定するのが非常に困難であるのは、このような理由からである。

しかし、学生の訳に、辞書の語義の羅列からの脱却が見られ、さらに、訳語選びに一定

の指針が設定出来ている訳は、翻訳のアプローチが効果的であったことを一定程度、示唆していると、ここでは判断した。以下、そのような学生の訳および考察を抜粋して紹介する。

5. 2. 1 具体的な単語の解釈

まず、具体的な単語の訳出に対して、上述のような意味において翻訳のアプローチが効果的であったと認められる訳、そこに見られる特徴と学生がその訳を選んだ理由を述べたものを紹介する。

先述の通り、翻訳のアプローチが効果的と判断する上での基準は、辞書から訳語を見つけるという行為だけではたどり着けない訳であること、と考える。時代背景および日本語の特徴についての学びが、訳語選びに教育的効果をもたらしたと推察する根拠として、*Imagine* に出てくる2つの単語、*possession* と *dreamer* を学生がどう訳したのかを以下に示す。

Possession

辞書では所有、所持、占有、財産 (pl)、領地 (pl) などが一般的な訳として示されているが、学生の訳では、冷戦という時代背景を意識した訳がいくつか見られた。

- ① 占領：東ドイツが西ベルリンの一部を占領したことを表すため。
- ② 領地：国が持つ財産や所有とは何か、と考えた時、一番分かりやすかった言葉が「領地」だったため冷戦の文脈に合わせて。
- ③ (no possessions で) 誰も何も持たない：冷戦時代、ソ連ではすべてがみんなのモノという考え方で動いていたが、実際は特権階級が存在していたことは旧ソ連に住んでいたゲストの話からも学んだ。作者はそのような状況に対して、特権階級もない、だれも何も持たない世界を作ろうという意味で呼びかけているのだと考えた。

Dreamer

辞書では、夢を見る人、夢想家、空想家、空想にふける人などが一般的であるが、学生の訳の中には、名詞形で「～人」や「～家」という原文の単語の形式を残した直訳的なアプローチではない訳出が見受けられた。

- ① 夢見がち / 夢をみすぎ：最近の曲の中に夢想家という言葉聞いた覚えはなかったため。
- ② ドリーマー：歌のリズムに合うようにしたかったため。
- ③ そんなの夢だ (なんていうのかな)：優しくわかりやすく平和の歌を歌っているという設定で夢想家という難しい言葉はそぐわないと思い、シンプルに言い表せる言葉を探し文章にした。

もちろん、このような訳は、学習者すべてに見られるわけではなく、すべての訳語についてあてはまるわけでもない。

しかし、少なくとも、翻訳という学習を通じて、少なくない生徒に、英日訳についての変化およびそれまでの思考プロセスに何がしかの変化がみられたことは示唆していると言えるだろう。それは、英語から日本語の訳を辞書の中から選ぶという、それまでの文法訳読で身に付けたとみられる英語と日本語の関係についての認識を断ち切れたからこそ生まれたものである。そうして初めて、新たな姿勢で英語と向き合い、コンテキストを考え、その中で意味をくみ取り、媒体や表現方法、世界観にあった言葉でその意味を再現する、という行為が可能になったのではないだろうか。

5. 2. 2 英語理解に対する認識の変化が推察される学生のコメント

以下は翻訳作業を終えての学生のコメントである。翻訳の実践を通して英語に対する新たな気づきが見られたものを抜粋する。なお、コメント番号に続いて、コメント内容の要点を記しておく。

コメント①——作者の世界観に近づくことの難しさについて

作者と自分の解釈が同じか疑問に思いながら翻訳作業をした。「本物の翻訳とは何か、だれにもわからない」と授業で学んだものの、「本当の訳」というものに近づけたいという思いは抑えられなかった。しかし、学び、想像すればするほど、自分ではない人の詩を訳すことは不可能ではないか、と感じ、初めて翻訳するのが怖いと感じた。そのため、作者がこの詩を書いていたときのことを思い浮かべ、何度も声に出して読み、作者がどう思っているのか、その世界を設定した。

コメント②——話し言葉と書き言葉のニュアンスの違いについて

話し言葉の方が多少、言葉が砕けた感じでもメッセージが強調され、人に伝わりやすくなると思い全体を通して話し言葉にした。英語の歌詞が何を伝えたいのかを汲み取り、それをどのように表せば適切かという日本語の言葉の選択が難しいと思った。

コメント③——言葉選びとニュアンス

歌詞は、小説や記事と違い、短い限られた文字で言いたい事を伝えなければならず、どこまで意識してよいのか、どのような言葉を使うと伝わりやすいのか、非常に気を使った。特に工夫したのは、言葉の語尾の使い方。「～しよう」、「だよ」とか「～だ」など、少し語尾を変えるだけで、歌詞のイメージは全く違うものになってしまう。私は、やさしく語りかける母のような訳にしたかったため、女性が話すような言葉を使った。

コメント④——抽象性と背景知識や文脈の関係

抽象的な言葉が多く、それを、どのように学んだ背景を活かしながら解釈するかで訳がかわってくるところがあった。

コメント⑤——背景知識取得による理解変化

初めて見たときは、第一パラグラフの時点で何のことを言っているのか全くわからない状態だったが、授業が進み、冷戦とはどのようなものかが明らかになっていくうちに、様々な思いが出てきた。ジョン・レノンが何を言いたいのか、わかった気がした。

コメント⑥——背景、知識の重要さ

訳詩をする前は、時代背景や多くの情報を集めてするものだと思わず、英語を日本語に直す簡単な作業だと思っていた。しかし、作者の歌詞に込めた想いや、言葉の選び方に着目すると、単純な言葉の変換ではいけないと改めて感じた。特に *Imagine* は平和や宗教などがキーワードになっている歌詞だったので、1970年代のアメリカの時代背景について情報を集め、その時代を知ることで、訳詩の深さも理解できた。

コメント⑦——人称代名詞の日英の違い

英語で一人称の主語を表すのは「I」、二人称は「you」しかないが、日本語では様々。今回、当初は「私」と「あなた」としていたが、堅苦しい感じがしたので、より素朴で親しみやすい「僕」と「君」にした方が伝わりやすいと思った。

コメント⑧——原文との距離

訳すときにどこまでオリジナルを崩していいのか、全く違う単語を使ったり、逆に使われている単語を消したりすることによって、日本語としては理解しやすくすると思ふ反面、書き手は一語一句に気持ちを入れていると聞いたことがあり、そのバランスが難しい。

〈例〉I wonder if you can 難しいことかもしれないけれど

この訳では、一語も（直接的に）英語の単語が意味する日本語は出てこない。

コメント⑨——コミュニケーションとしての側面

今まで、翻訳について学んできたが、どの翻訳も、まず相手（作者）⁸を知ることが大切だと実感している。人と人が向き合っ取るコミュニケーションとは少し形は違うが、翻訳も文章を通して行う異文化コミュニケーションなのだと思う。そのようにして行った作業は決して簡単ではなかったが、一番初めに何も考えずに訳した *Imagine* よりも意味のある訳詩になったと思う。

コメント⑩——それぞれの取り組みの意義

授業内で取り組んできたことすべてはこの作品につながっていた。個別だと思っていた作業に途中から一貫性が見えてきた。その一環として、自分の英語力のなさに気づき、翻訳で要求される幅広い分野における高い英語力を改めて実感した。学び続ける姿勢を維持したい。

以上は一部であるが、このように、学生のコメントからは、当初の目的に据えていた文脈・背景知識の意義に言及するものが複数あると言える。一方で、英語とのかかわりが薄い翻訳プロセスについての言及もあることに気がつく。つまり、語尾ニュアンスの大切さ、英語と日本語の違い・類似点に対するコメントである。また、翻訳独特の考え方である「原文との距離」や、英語学習としてではなくコミュニケーションとしての気づきなど、翻訳のプロセス同様、学生の気づきも多岐にわたることがわかる。

翻訳を通じて英語と日本語の関係性を改め築きなおすという、教育者の視点は、もしかすると多くの場合、直接的には学生には認識されていないかもしれない。しかし、学生のコメントおよび実際の訳出やそれぞれのパラグラフや単語についての説明から類推すれば、ある程度は、英語への向き合い方が変わったことが示されているのではないだろうか。その意味で、翻訳が英語学習として、一定の役割を果たせる可能性を示せたと思う。また、本稿で取り上げた詩の学習では、解釈の自由度が高い分、個人に文脈設定をゆだねる部分が大きくなり、個人個人が作者の意図を自分なりに汲み取り、その世界観を構築することによって、様々な訳詩が作り上げられることをクラス内で確認することができたことも、また、学習者にとっては、文脈の大切さを認識するよい機会となったのではないだろうか。

上で紹介したものは、学生が課題として提出した一部の抜粋にすぎない。課題の全貌を紹介するのは困難であるが、一人の学生の中で、原文の世界観の構築が個々のパラグラフや単語の解釈および訳出にいかに一貫性を持たせることにつながるのかを示すために、抜粋ではあるが2学生の翻訳および解説を Appendix で紹介しておく。課題に取り組むまでの一連のプロセスが、少なくとも一部の学生には効果的に働き、学習前ではなしえなかった言語観や思考力に基づいた歌詞の訳出作業へと導くことができたことを示している。

6. おわりに

第一回目の授業で、何も学習していない状態で訳してもらった際のコメントでは、「できるだけ自然な感じになるように」や「どこで切るか迷ったが、直観で訳した」など、訳出に対して指針がなく処理していることがわかる。また、この歌が冷戦期に作られたことは知っている学生でも「冷戦の背景がわからないのでどのようなニュアンスで伝えてよいかわからなかった」とコメントしていた。いずれにしても、疑問を解決する指針がなく、訳出の際には辞書から言葉を選ぶしかない状況に置かれていた。

背景を学習し、作者の意図を自分なりに解釈し、その世界を再構築し、歌を届ける相手を決定してトーンを定める、というプロセスを経た後には、その作品の文脈を認識することができる。文脈の認識および確定は、学生が訳出する際の言葉選びに指針を与え、結果的に訳に一貫性を与える。このことは、時代や政治状況、誰が誰に向けてどのような意図をもって語っているのかなどの背景もしくは作品の世界観を十分理解することが翻訳という作業にとって必要不可欠であることの証左であるが、英語教育の中で翻訳を取り入れる

ことの一つの意味とは、まさに、このようにコンテキストに言葉を置き、そこでの意味を認識したうえで、訳出する言葉を考えるという作業を自然に行えるようになることであろう。

先に述べたように、中学・高校と文法訳読中心で学んできた学生たちは、英語から日本語へと訳出する際に、文脈や状況を意識することなく英語から日本語へと直接変換させてしまうことが少なくない。文脈も世界観もなく、指針なく辞書を頼りに恣意的に訳語を選ぶだけである。しかし、実際は、言葉には必ずコンテキストがある。言語とは必ずコンテキストの中で使われているからである。本稿で紹介した実践報告は、翻訳が、文法訳読ではなかなか意識化させることのできない言語観を英語学習者に気づかせる可能性を秘めていることを示す一例である。

もちろん、同様の効果を引き出す、よりシステマティックな方法もあるかもしれない。また、既存の英語学習カリキュラムで、この部分が全く手付かずで見過ごされていると言うつもりもない。しかし、翻訳者の立場から大学での英語教育に携わるとすれば、コンテキストの意識化は、英語学習としての翻訳が今後も重視していくべき側面であり、英語学習に翻訳が寄与し得る点の一つであろう。今後は、このことを明確に意識し、さらに効果的なカリキュラム構成を考える必要があるとも感じている。今後も、英語教育における翻訳の役割を研究し、授業の拡充へとつなげていきたい。

注

- 1 「等価」とは、「意味とは何か」や「言語の役割とは何か」などの多岐に渡る議論を包含する複雑な概念である。詳しくは、ヤコブソン（田村すず子他訳）「翻訳の言語学的側面について」（『一般言語学』所収、みすず書房、1973）、ナイダ（沢登春仁他訳）『翻訳・理論と実際』研究社（1973）。
- 2 日本語の人称代名詞については翻訳家の金原瑞人も、その豊かさ故の翻訳のむずかしさについて以下のように述べている。「英語と日本語の一人称はかなり違う。英語の場合・・・幼児でも若者でもおばあちゃんでもドラゴンでもバルタン星人でも、みーんな“I”なのだ。」それに比して日本語は「ぼく、おれ、わたし、わたくし、あたし、あたい、自分、自ら、己れ、われ、わし、拙者、朕」と「Iにあたる一人称が10や20はあって・・・それぞれが独自のニュアンスを持って」おり、「したがって、“I”をどう訳すかで思い切り悩むこともある」（金原 2005: 109）。
- 3 例えば、「駅で会いましょう」という日本語に相当する英語“I will meet you at the station.”は、文法訳読では、「私はあなたと駅で会います（しょう）」のような、人称代名詞を訳出した、文法的には正しいが、自然な日本語とは言えない文章にしばしば訳出される。
- 4 辞書の項目とは、かつて誰かが立てた不完全な分類にすぎない。辞書は、言語学的な世界に属し、現実的に運用される言葉として「顕在化」されるのを待っている「潜在的」なものである（平子 1999: 28）。
- 5 文化差のある場合の訳語選びに用いられる典型的な手法は「起点言語」の文化に合わせた訳を選ぶ「異質化（foreignization）」と「目標言語」の文化に合わせた訳を選ぶ「受容化（domestication）」とがある（マンデイ 2009: 4）。
- 6 J.D. Salinger (1951) *The Catcher in the Rye*: Little, Brown and Company.
比較対象として使用した日本語翻訳作品は、①野崎孝（1964）『ライ麦畑でつかまえて』白水社、

- ②村上春樹(2003)『キャッチャー・イン・ザ・ライ』白水社。
- 7 Antoine de Saint-Exupéry (2000). *The Little Prince: Le Petit Prince* (R. Howard, Trans.): A Harvest Book Harcourt, Inc.(1943). 比較対象として使用した日本語翻訳作品は、①内藤濯(1953)『星の王子さま』岩波書店、②三野博司(2005)『星の王子さま』論創社、③倉橋由美子(2005)『新訳星の王子さま』宝島社。
- 8 (作者)は筆者挿入。

引用文献

- 平子義雄(1999)『翻訳の原理——異文化をどう訳すか』、大修館書店。
- 広田紀子(2007)『言葉は国境を越える』、上智大学出版。
- Kersaudy, G. (2001). *Langues sans frontières. A la decouverte des langues de l'Europe*. Paris, Autrement.
- ウスティノフ, ミカエル(2008)『翻訳——その歴史・理論・展望』服部雄一郎訳、白水社。
- Suzuki, T. (2001). *Words in context: A Japanese perspective on language and culture*. Tokyo; New York: Kodansha International.

参考文献

- Baker, M. (1992). *In other words: A coursebook on translation*. London; New York: Routledge.
- 金谷武洋(2004)『英語にも主語はなかった』、講談社。
- 金原瑞人(2005)「一人称の話」、『翻訳を学ぶ人のために』、安西徹雄他編、世界思想社、109-111頁。
- 川本皓嗣, 井上健 編(1997)『翻訳の方法』、東京大学出版会。
- 木村榮一(2012)『翻訳に遊ぶ』岩波書店。
- 三ツ木道夫(2008)『思想としての翻訳』、白水社。
- 森住衛(2004)『単語の文化的意味』、三省堂。
- マンデイ, ジェレミー(2009)『翻訳学入門』、鳥飼久美子編、みすず書房。
- 奥津文夫(2002)『日英比較・英単語発想事典』、三修社。
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』、岩波書店。
- 田守育啓(2002)『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』、岩波書店。
- 山田雄一郎(2005)『外来語の社会学——隠語化するコミュニケーション』、春風社。

Appendix

以下は、課題全体の解釈、パラグラフごとの説明および最終コメントの関連性を示す学生A、Bの提出物からの抜粋である。

学生A

1. 全体の解釈

1960-70年代、世界のあらゆる国々は二大超大国である米ソの冷戦の影響下にあった。・・・中略・・・。モノを手に入れるために行われた戦争で、罪もない人がモノを奪われ、たくさんの人が殺された。同時に戦争は、人々の心を変えていった。過ちに気づいた人、戦争の愚かさを知る人は、必ず恐ろしい世の中を改善するため、また、明るい未来のため

に行動していった。・・・中略・・・。この時代のキーは、「相手がそうするからこっちもそうする」、例えば、あの国核兵器もっているからこっちも持つわ」という考えだ。そんな時代だから、その考えを良い方にできるだろう、というのがこの詩の意味ではないかと考えた。具体的には「相手が核兵器持たないなら、こっちも持たないわ」ということ。

この詩は全て、作者がこの詩を聞いている人に話しかけているように訳すようにした。

想像してみよう、という訳語にしたのは、作者がこの詩を聞いた人に「想像して」と投げかけるだけでなく、「一緒に考えよう」という意図を絡ませたかったからだ。この詩全体で大切なメッセージは「皆が手を取り合うこと」だと思うので、「君も考えてよ、僕も一緒に考えるから」というような意味が含まれているのではないかと考えた。

2. パラグラフごとの解釈および説明

<第1パラグラフについて>

天国と地獄は宗教的観念だ。天国は善の象徴で、苦痛のない理想の楽園とされ、反対に地獄は悪の象徴だ。仏教では人間が死んでから罰を受ける場所、キリスト教では救われない魂が陥る場所と考えられている。一見、宗教を否定しているかのような印象を受けるが、そうではない。というのも、人間は死後、苦痛のないところか罰を受けるところのどちらかに振り分けられるわけじゃなく、死んでもみな平等だということを伝えたいのではないかと思い、天国も地獄もないという言葉を使ったのではないかと考えた。

その後の、“all the people” は、良いことをした人も悪いことをしてしまった人も関係なく、平等（同じ）の意味が込められているのではないかと考えた。そこで私は「すべての人」と訳した。4－5行は、作者が話しているという前提であるので、繋がる文章にした。また、天国や地獄がどうか、死後の話をする前に、大事なことは今を生きているということではないか。死後を考える前に大事である今を見てほしい、という意図で5行目 (Imagine all the people) は作られたと考えた。・・・中略・・・

<第4パラグラフについて>

所有するのは物もっているからだ。作者がここで “possessions” という単語を使ったのは、あまりこの世に無駄な物が溢れすぎているからではないかと考えた。そんな当たり前の世で生きる私たちを、想像できるのか、という作者の懸念から2行目 (I wonder if you can) は作られたのではないかと考え、「出来るかな」と挑発的な言葉を選んだ。物とは、そこら中に溢れている物、または資源だったり、不必要な核兵器だったり。そしてそれは、だれかがあるものを欲しがって手に入れたもので、人の欲と関係するものだ。所有することは、自分のためかもしれないし、他の人のためであるかもしれない。物は人の欲を引き起こすもの。人は物を求めてたくさん奪い合い、競争し合ってきた。さらに、その要求の犠牲となる人が世界中にたくさんいる。時代によっては人間を奴隷という形で物のように扱うこともあった。特に先進国は、物に溢れているにも関わらず、発展途上国や貧困国から更なる物を搾取しようとする。物さえなかったら欲しいと思う欲求も、飢えだっ

て起こらない。目先の物ばかりで、それに伴う犠牲を考えない。人は分け合う心を忘れて
いる。だから作者は、人間はみな同胞だと、兄弟であると、思い出してほしいのではない
かと考えた。

3. 気づき

詩というものは、本当に抽象的なものだと思う。この詩には、「戦争」や「核兵器」な
どの具体的な単語がない。それゆえ、解釈の仕方はたくさんあり、どう解釈するかは個人
によって異なるだろう。基礎知識と基礎情報の収集を行なわなければ、だれにでも出来る
ただ訳す作業になる。背景を知らない限り、翻訳作業はできない。そのことの重要性を、
今回のプロジェクトは再認識させてくれた。

学生B

1. 全体の解釈

Imagine は冷戦中の 1971 年にジョン・レノンによって作られた。…中略…当時はちよ
うど冷戦時代。東西政府はともに苦しい関係を何十年も続けてきた。国民は精神的にも肉
体的にももっとも苦しかったと思われる。そんな世界が長い間緊迫していた時代に、当時
影響力のあった一人の男性によって作られた歌であると私は解釈している。

Imagine の詩は「Imagine」と命令形で始まる。日本語訳にすると「想像しなさい」だが、
私はこの歌を、まるで父のような心の広い人物からわが子へとうたいかけるような歌に感
じた。大人から子へ、というイメージである。それゆえに翻訳した際の調子も、子供にや
さしく諭しかけるような、やさしく、語尾もカジュアルで柔らかい言葉を選んだ。ほとん
どの漢字熟語も子供でも理解しやすいよう、情景を思い浮かべやすいよう変えている。

2. パラグラフごとの解釈および説明

<第1パラグラフについて>

一段落目にはどこにも「宗教」という英単語はないが「天国」や「地獄」といった言葉
から、この段落は宗教について話したいのではないかと推測した。その結果「宗教のない
世界を」という文を作った。宗教とは本来、人を幸せにするものであるはずだが、長い歴
史の間人々は宗教の違いなどで争ってきた。それは近年でも同じことが言える。違う宗教
のものに対して、偏見を持ったり、忌み嫌ったり。時には戦争の表面上の理由にされるこ
ともある。なぜ人を幸せにすることが本質的な目的である宗教が戦いの原因になってしま
うのか、そんな神や天国地獄といった不確かなもののために命を犠牲にする必要は一体ど
こにあるのか。宗教が違っていても、どんなに人々が争おうが空はつながっている。その
たった一つの空の下にいる同じ人間であるということ。同じ空の下、遠いどこかで一生懸
命一日一日を大切に、自分と同じように生きている人間がいることを忘れてはいけない。
そんなメッセージをこの段落は伝えたいのだと考えた。

<第3パラグラフについて>

「But I'm not the only one」は、このような歌を作ってまで世界の平和を心の底から祈っているのは自分だけではないはずだ、という意味だと思う。しかし、「私」が主体的なフレーズばかりでは読み手が受け身になりがちなので「きっとみんなも心の中で夢見てるはず」と読み手を巻き込む形にした。

また、「I hope someday you'll join us」は、直訳すれば「あなたが私たちにいつの日か参加することを願う」となる。人々にもっと平和活動に参加してほしいという思いが込められているのだろうか。しかし、そのままでは少し訴えが弱い気がした。さきほどと同じ方法で、「いつか君も声を出して立ち上がるだろう」と読み手を主語にすることでより思いの強い言葉にした。

<第4パラグラフについて>

第四段落目は独占欲・所有欲についてだと解釈した。「imagine no possessions」はそのまま「財産がないことを想像して」となる。しかしこれではイメージしにくい。「お金もちも貧乏もない世界を想像して」とするほうが、ずっと「平等」をイメージしやすいと考えた。あくまでこの詩は大人から子へ話しているように、という前提なので「no need for greed or hunger」では「貪欲」「飢える」ではなく「食べ過ぎる」「お腹がすく」という言葉にした。しかしこれらは決して金銭や食事に関してだけ言いたかったのではなく、権力、地位などの目に見えないものも含まれる。冷戦時代、米ソは、自分たちはこんなにすごい力をもっているぞと見せつけ合い、その結果、戦争が起り、激化し、長引くことになったからだ。・・・中略・・・

3. 気づき

改めて *Imagine* を訳していて、この詩が以前とは違ったものに見えた。最初の授業では平和を願う人気の歌、という認識だった。しかし、今では、裏に深い意味を持ち、その時代背景も思い浮かべることができるようになった。・・・中略・・・ただ、難しかったこともあった。まず、英語の単語をそのまま直訳しないということ。もしかしたら、単語をそのまま訳すこともいいのかもしれないけれど日本語話者にとって、より読みやすく、より分かりやすく、より状況を思い浮かべやすい単語は何かと選ぶのに苦労した。

英語と日本語の構造の違いのギャップをうまく埋めるのにも苦労した。英語であれば、「Imagine, there is no heaven」の一文は直訳すると「想像しなさい。天国はないと。」となる。命令したあとに、その目的語がくる英語独特のこの文章は、日本語にすると不自然だと感じた。日本語では「天国はないと想像しなさい。」として目的語が先にくる方が自然であり、しっくりくる。そう判断した上で、「宗教のない世界を想像してみよう」等の文を選んだ。

